

文教大学神楽講座の感想

「神楽は舞である」今回の講義で一番勉強になった言葉である。ダンスに慣れきって、このところそちらからしか眺めていなかったことに気づかされた。

神楽は舞である。ダンスではない。踊りでなく、舞なのだ……。自分は、舞と踊りを区別できるだろうか、とつくづく考えさせられた。結論から言うと、出来ない。おどりはわかる気がする。こおどりする。盆踊り。黒澤明の「椿三十郎」という映画の中で、絶体絶命の場面で敵が陣地を飛び出してくる。隣の屋敷で固唾を飲んでいた青年たちは捕虜とともに肩抱き合って小躍りする。踊りは感情の発露であり、自己発生的なものだ。パッションに従った、パッションからくるエクスタシー。ロックのコンサートのように、ステージのボルテージが観客に乗りうつる。演者の溢れた熱情は誰か観客のためではなく、自分の思いを吐き出すことのようなのだ。しかし、むしろそのおかげで観客は熱くなる。観客も自分のために熱くなれる。

獅子舞にそれはない。巫女舞にもない。舞がどんなものかはっきり示せる定義が持てないが、講義と実演から感じたものは、踊りやダンスと確かに違うものだった。冷静なのだ。どこか冷めている。そこに神々しさ、神聖さを感じる。清める、ということばも同様である。それが現代にないものだけに、ダンスの対極にあるものだけに理解しがたい。理解できずに眠くなる?!もしかしたら、そこに舞の価値があるのかもしれない。連綿と続く、その連続性の中にこの世ならぬものを感じるのかもしれない。この世ならぬもの、彼岸。

かなた(彼方)、第三者。舞は、他者のためにあるという。自己や個が消失し、それは舞手の人間性まで消失させるかのように感じた。舞があって、人が消えるとき、そこに「場」だけが残る。悠久の世界、流れ、とでもいうのだろうか。冷静になって、しんとした心に「沁みる(意識される)」のは、神楽殿であり、神殿、境内である気がした。大学の講堂では、三つ並んだ幣束が、私にとってとても印象的であった。

神楽は神のためにあるという。土地(場)を意識させ、大地(場)の価値を再認識させる。そういう意味で、他者の、身の周りの存在と

意味を復活させてくれる、そういうものだった気がした。

ここまで書いて、申し訳なく思うのは、後半21日の講義を欠席したことである。仕事の都合で参加できなかったとは言え、一部のみを見て全体を語っていいものか。大変興味深く思う分だけ、理解も感想も消化不良の感が否めない。どうかもう一度、このような場を設けていただければと切に願う限りである。

最後になりましたが、私にとって、神楽ひいては日本文化の再認識(再発見)をさせてくださった文教大学の90周年をお祝い申し上げます、また、今後のより一層の発展をお祈り申し上げます。ありがとうございました。

(K. Tさん・川越市在住)